ほしいと訴えるおばさん、その人が佐伯敏子さん、七十二歳である。

わが家に届いた封書の中には、ぎっしりと彼女が書いた資料と、多くの修学旅行の生徒から寄せられた文章が入っていた。彼女と出会えた人たちはみな心を動かされ、自分の生き方を問い直してみるのではないだろうか。私の書いた感想文に彼女はこう書いてくれた。「あなたの思いの一字一字は私の喜びではなく、数知れない死者たちの喜びであると思えます。戦争を知らない人として、広島で見たもの聞いたことを考え行動に繋げてくださることこそ人間である」と。自らは被爆者ではないが、自分に連なる人々を思い、広島にこだわり続ける彼女。そのこだわりに真摯な人間の生きざまをみた。私も人間でありたい。人間の尊厳を守る核兵器廃絶の行動にこだわり続けよう。

彼女の封書が届いた日、折しも核廃絶6・9行動の日であった。

（新潟市・団体職員）

山の口が開く

佐藤守正

みなさんは、「山の口が開く」という言葉をご存じでしょうか。……と問うているわたしも、実はつい最近初めて聞いた言葉なのです。曰く「薪山の口」「かちき山の口」「かや刈り山の口」「くずっ葉山の口」、そしてそれぞれの山の口があくと言ったのだそうです。

私の勤務する学校の校区もかつては貧しい農山村。戦後間もなく地域の先達たちの努力で始めたスキー観光の事業が軌道にのるまでは、山に大きく依存した暮らしを続けていました。その頃までのこの地域の人達のおきての一つ、それがこの「山の口」でした。「薪山の口が開く」のは、四月四日。その日まで自制していた村人たちは、冬の間の暖房のためと、一年中の囲炉裏の燃料にする薪を切り出すために、一軒になた二ちょう（つまり働き手二人）という約束を守って、まだ雪の残る山に繰り出しました。国有林の雑木の払い下げを受けた場所については、村民の協議で区割りをするのですが、地区の共有林の雑木については、こうした規制の下での自由競争であったそうです。

「かちき山の口」の「かちき」とは山の草のこと、そしてこの山があくのは六月六日、その日はちょうど最盛期である田かきの仕事も脇に置いて、山に草刈りに入りました。

その頃どこの家でも飼っていた農作業用の牛や馬の餌のための草刈りは、山の口があく前でも認められましたが、刈った草を束にして馬などに背負わせ

て来ることは自制しなければならなかったのです。そして山の草が十分伸びた六月六日のこの日から、大量に刈り集めた草を田にすき込んで肥料にする仕事を始めるのです。

「かや刈り山の口」は、九月二十一日に開きました。これは限られた萱場の萱を競って刈ったので、それは壮観でした。まだ暗いうちから一升の飯を詰めたわっぱ弁当を担いで山に入り、現場で夜明けを待つのです。山の端から日がさすと同時に一斉に刈り始め、飯を食うのも忘れるほどだったと、古老は語ります。萱は、積み上げた薪や、時には雪の下になる頃まで田に置いた稲などが雨水で濡れるのを防ぐシートだったのと同時に、家の周囲の雪囲いの材料ともなる貴重な材料だったために、その確保は男の大事な仕事だったのでしょう。

「くずの葉山の口」の開くのは九月二十四日、家畜の冬の餌にする干し草のための、葛の葉は最後の材料でした。

「山の口が開く前に、ズルをして山に入る人はいなかったのか」と、この話をすると最初に子どもたちは質問してきます。私も同じように考えて古老に質問しますと、「そんなことは聞いたこともなかったな。そんなことは考えもしなかった」との答え。当時の村落共同体の紐帯の強さを窺わせると同時に、この掟が、自然資源の再生産を保証する条件だったことを知る人々の当たり前の道徳だったのでしょう。

校区がスキー観光地として賑わい始めてからすでに四十年、激変した地域の「昔」を今のうちに記録しておこうと、地域の母親たちと一緒に、老人たちからの聞き取り調査を始めていますが、これが意外に楽しいのです。すっかり都会化しようとしているスキー民宿街に農村の牧歌的なたたずまいも保存・再生させたいと考える地域の人々との共同の仕事としてのこの「昔調べ」が、今の私の仕事の核になっています。

（南魚沼郡・上関小学校教諭）

今、子どもたちは、自分で考える生活時間が足りない

八幡明子

「私は、家に帰ってから、おやつを食べたりテレビを見たりしています。もっと早く帰られれば、友達と遊んだり外で思いっきり遊べるけど、いつもおそく帰るから、あまり遊べません。でも休みの日は、友達と遊べます。これからも、友達と元気よく遊んで楽しくしたいです」（小四女）

「ある月曜日の私のスケジュール…▽五時すぎに家に帰る、▽六時ごろまでじゅくで勉強、▽六時すぎ夕食、▽六時半から九時までミニバス、▽九時から家庭学習